

みやび展

作品のみどころ

—山本茜 源氏物語シリーズ—

解説：山本茜

私と源氏物語

今年で源氏物語を読み始めてからちょうど30年が経ちました。何度読み返しても新たな発見があり、一生かかっても読みきれないと思うほど深遠な世界です。日本史上、最も洗練された超一級の美意識を持った時代。芸術に携わる者としてこれ以上の教科書はありません。ほぼ毎日読み返すので、源氏物語はもはや私の一部となっています。

截金はまさにその源氏物語が紡がれた時代に大流行した装飾技法です。もともと日本画家を目指していた私がこの繊細優美な輝く文様に惹かれたのは大好きな「源氏物語の香り」がしたからに他なりません。截金ガラスという表現方法を手に入れてから、必然的に源氏物語五十四帖各帖を立体作品にすることがライフワークになりました。各帖のワンシーンを説明的に表現している訳ではなく、私が物語を読んで感じたことや頭に浮かんだイメージを形にしています。物語を通して自分自身を表現しているのです。

現時点で22帖、合計23作品が完成しています。第一帖「桐壺」から順番に制作している訳ではなく、私の中に長年読み返してきた中で確立された五十四帖の揺るぎないイメージがあり、技術的に出来そうなものから取り掛かっています。

全帖を完成させた暁には作品を一堂に並べて展覧会を開くのが夢です。遙か遠い道のりですが、一点一点真摯に向き合い、目標に向かって歩み続けます。



山本茜 源氏物語シリーズ 第一帖「桐壺」 2013年 佐野市立吉澤記念美術館寄託

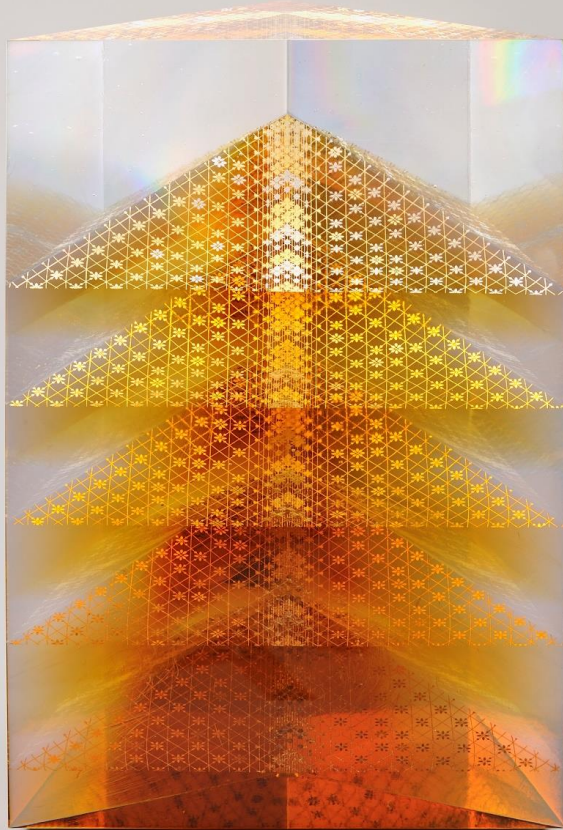
さきの世にも御契りや深かりけむ、
世になく清らなる玉の男御子さへ
生まれたまひぬ。



私が源氏物語に初めて触れたのは、中学校での古文の授業でした。まだ古語に不慣れでイメージ内容が頭に入ってこなかったのですが、「世になく清らなる玉の男御子さへ」の部分を読んだ時、頭にパッと閃いたのが、強く光り輝く黄金の玉でした。その時のイメージをそのまま表現したのがこの作品です。閃光を表現したくて、x, y, z軸で截金を封入するためにガラスを8ピース使っているのですが、1ピースだけ、紫のガラスを入れました。源氏が紫にゆかりを持つ名前の女性達と深く関わり合うことになることを暗示しています。



山本茜 源氏物語シリーズ 第三十三帖「藤裏葉」 (光の道) 2013年 佐野市立吉澤記念美術館寄託



色まさる籬の菊も折々に
袖うちかけし秋を恋ふらし (源氏)

紫の雲にまがへる菊の花
濁りなき世の星かとぞ見る
— 時こそありけれ (太政大臣)

帝の息子でありながら、源姓を与えられ、臣下に降った源氏でしたが、ついに准太上天皇となって、位人臣を極めます。様々な困難を乗り越え、栄華を掴んだ様子を、光り輝く階段状の道で表現しました。若かりし頃、源氏の良きライバルだった頭中将も今や太政大臣。一段、一段、登ってきた過去を振り返り、ともに歌を読み合い懐かしみます。

栄華を極め、幸福の絶頂のまま人生を終えるかと思われた源氏でしたが、紫式部はそれを許しませんでした。次帖から彼の人生の凋落が始まるのです。



山本茜 源氏物語シリーズ 第四十帖「御法」 2013年 佐野市立吉澤記念美術館寄託 ※パネル展示

おくと見るほどぞはかなきともすれば
風に乱る萩のうは露（紫の上）

ややもせば消えを争ふ露の世に
おくれ先立つほど経ずもがな（源氏）

源氏に最も愛されたがゆえに最も深く傷ついた女性、紫の上。大きな後ろ盾もなく、源氏との間に子供もなく、ただ自身の愛だけで彼の心を繋ぎ止めるしかなかった彼女は、だれよりも深く源氏の裏切りに傷つき、最後には心の平安を得るために出家を望んだものの、それすら叶えられることはありませんでした。

「御法」は紫の上の臨終のシーンです。彼女は死によってようやく魂が解放され、安らぎを得たのではないのでしょうか。円筒形のガラスの光学的特性により、内部に配された截金文様が螺旋状に繋がり、葬送の煙とともに紫の上の魂が天に昇っていく様子表現しました。

